

【論考】

千葉大学国際教養学部の留学と SULA

Study Abroad Programs and Role of the SULA at the College of Liberal Arts and Sciences, Chiba University

千葉大学副学長（教育改革）、国際教養学部長 小澤 弘明

OZAWA Hiroaki

(Vice-President/ Dean, College of Liberal Arts and Sciences, Chiba University)

キーワード：学修支援、留学支援

1. 国際教養学部の特色

千葉大学国際教養学部は、2016年4月に創設された。千葉大学では10番目の学部、看護学部以来41年ぶりの新設学部である。この学部の設立は、千葉大学がタイプB(グローバル化牽引型)に採択された2014年のスーパーグローバル大学創成支援事業の主要な柱のひとつであり、数年の構想を経て実現したものである。学部設立の主旨は、千葉大学における教養教育の再定義を進めることと、大学全体のグローバル化をリードするパイロット学部の役割を果たすことである。

国際教養学部は、地球規模の課題（グローバルイシュー）解決をめざす、PBL型教育を目指している。そのため、千葉大学が人文社会科学、自然科学、生命科学をカバーする総合大学である利点を活かして、文理の別や学問分野を出発点とするのではなく、課題の認識からスタートし、さまざまな知識を選択・統合しながら、解決能力を育む教育を実践することとしている。国際教養学部であるが、文理混合教育というのが本学部の特徴のひとつである。

教育面の特色として、徹底したアクティブラーニングが挙げられるが、それと並ぶ本学部の特徴は、グローバルな世界と地域の双方を舞台として活動体験を重視するソーシャルラーニングを重視している点である。このため、フィールドワーク、インターンシップ、ボランティアというキャンパス外の活動を通して「現場で学ぶ、現場を学ぶ」ことを学修理念として掲げている。個々の体験によって獲得した知識や学びの形式を普遍的な課題として把握することのできる能力を育てていくために、事前学修・事後学修によって体験を挟んで体系的な科目としている。

2. 海外留学

また、国際教養学部は、異文化との接触や国際的な学生間の協働を通じて、国際理解と日本理解の双方を進めるために、留学を必須としている。留学目的、留学先、留学時期や回数は学生個々の課題解決の道筋に合わせて、あくまで学生が主体的に決定することになっている。

1) ターム制によるギャップタームの創出

こうした海外留学をスムーズに実現するため、千葉大学では2016年度から新たな学事暦として全学的にターム制を導入した。これは、1年間をおよそ2か月ずつ6タームに分割し、留学に対応可能なギャップタームを創出するものである。たとえば、国際教養学部は早期の海外体験を重視しているため、2年次の第2ターム（6、7月）に必修授業を置かず、第3ターム（8、9月）と合わせて4か月の海外体験を可能にしている。生命科学系の6年制の学部や大学院進学を前提としている自然科学系の学部では、むしろ高年次にギャップタームを設けて、学生の留学を促進することとしている。ターム制は、海外留学から帰国して千葉大学における学修に復帰するさいにも、効率的な履修ができるという利点がある。国際教養学部では、すべての授業がターム制にもとづいて行なわれており、ギャップタームに合わせた留学プログラムをつくるなど、新しい学事暦の強みを積極的に活かすことにしている。

（参考）千葉大学におけるターム制の導入等に関する方針

<http://www.chiba-u.ac.jp/education/termsystem/index.html>

2) 多様な留学プログラム

千葉大学は従来から海外留学を促進するために、学生に多様な留学プログラムを提供している。この結果、協定に基づく日本人海外派遣数は日本学生支援機構の調べによると、2011年度から2014年度まで4年連続で国立大学で1位を獲得し、2015年度も2位につけている。

具体的な留学プログラムとして提供されているものは、いくつかのカテゴリーに分かれている。海外研修英語・海外研修英語文化、初修外国語海外研修といった語学研修のプログラム、グローバル・フィールド・ワーク（B00T）という海外初心者向けのアジア諸国への短期プログラムは、ファーストステップのプログラムとして位置づけられている。

第二のステップとして、まずは海外の大学の学生と協働学修を進めるグローバル・スタディー・プログラムがあげられる。このなかには、ドイツのドレーズデン工科大学の学生とともに、ドイツにおける都市交通の現状と課題についてグループ学修を行うプログラムがある。また、グローバルボランティアという世界各地でボランティア活動を通じてグローバル感覚を養うプログラムもある。これは、

数多くのNGO、NPOとの協力関係を背景とするもので、中には日本語教育のボランティアや、スリランカで井戸掘りを行うボランティアなどがある。また、グローバルインターンシップという海外の大学と連携しながら、現地企業でのインターンシップを同時に行うプログラムもある。千葉市に本拠地を有する流通大手のイオンと提携し、同社のマレーシア本社の協力で、現地において日本の物産展を開催する企画も含まれている。

また、大学の世界展開力強化事業として採択されたツインクルプログラム（ASEAN各地の協定校と連携しながら、現地の小中高で教育体験の交換を行う）や、ポスト・アーバン・リビング・イノベーション・プログラムというメキシコやパナマと協力しながら、世界で活躍しうる「技術事業家」を育成する事業を展開している。農業・園芸学分野を中心にロシアの沿海州やサハリンと提携した人材育成プログラムも今後展開される予定である。

こうした短期・中期のプログラムを基礎として、海外派遣留学プログラムという半年～1年の海外留学プログラムが設定されている。千葉大学は全学的な学生交流協定だけで、世界各地の大学と157協定（2017年6月現在）を締結しており、提携校との緊密な連携によって、多くの学生を派遣している。

3. SULA

1) 学修支援

学事暦を変更し、多様なプログラムを用意したからといって、それが自動的に学生の留学に結びつくわけではない。学生は何を目的として留学するのか、どこへ留学するのか、どのタイミングでどれだけの期間留学するのか、について希望と同時に不安も抱えている。その希望と不安の双方に応えるために、千葉大学は独自の制度としてSULA（Super University Learning Administrator、スーラ）を導入した。国際教養学部は学生数に比して教員の数も多く、少人数教育を徹底できるという強みをもつものの、学生の進路や生活に関わる悩みに十全に応えることはできない。文理混合という学部の理念の中で、学生はどのような進路を選択していくか、どのような形態で学修や留学を進めていくか、について多くの課題を抱えている。それに応えようとするのがSULAの役割である。

千葉大学では、かねてより、アカデミック・リンクという考え方のもと、図書館に大学院生による学生の学修支援のための仕組みをつくっていた。ALSA（Academic Link Student Assistant）と呼ばれる大学院生や上級生は、「数学」「化学」「物理」「文系学習相談」等に対応して、学生の主体的学びを日々支援している。こうした、ラーニングコモンズにおける学修支援という考え方をさらに広げて、アカデミック・アドバイジングを行う人材を専門職として自立させることはできないか、というのがSULAという制度の最初の発想であった。課題解決を志向するために、どのような学問を修めれば良い

のか、千葉大内外の誰と相談すれば良いのか、直接の学修支援の対象は多様である。

2) SULA の誕生

そこでまずは、学務系の職員の中から優秀な職員をピックアップして、SULA に就任してもらうことにした。学部の特徴に合わせて、男性と女性、人文社会系の学務経験と自然科学系の学務経験などのバランスを勘案して、学内の2名の職員に最初のSULA に就任してもらった。学部長室に隣接する部屋を「SULA の部屋」として、週3回のオフィスアワーを設け、予約があれば個室での相談も受け付けている。2017年4月の国際教養学部棟のオープンに合わせて、新棟の1階にSULA ラウンジを設け、SULA にとっても学生にとっても快適な空間を実現している。

国際教養学部にはまだ1年生と2年生しかいないため、本格的な学修相談は行われていないが、生活や相談に関する相談はとぎれることなく、2年生の前半までにおよそ60パーセントの学生が留学の経験をもつという成果も生み出されている。これは、学生の志向にきめ細かく対応するSULAの支援によるところが大きい。学生の立場によりそって、学生の希望を引き出したり、生活に困難をかかえる学生に対応するのは、教員だけでは困難な課題である。生活相談がSULAの本来的な仕事なのか、という疑問ももたれるかもしれないが、学修を軌道に乗せるには、まずは生活の確立が必要なのである。また、留学についても、教員の多くは大学院生となって以降に研究のために留学したことが多い。学部学生の留学とは性格を異にすることもあるだろう。その点、学部学生のときに留学した経験をもつSULAの存在は、学生が不安をおぼえる点について、より共感をもって対応できると考えている。

こうして生まれたSULAの存在は、学生にとってはたいへん身近な存在であり、大多数の学生が複数回SULAに相談した経験をもち、長期留学を志す学生はまずSULAに相談してアドバイスを受けるという慣行がすでに確立していると言ってよい。なかには、常連となっている学生もいる。国際教養学部では、大学や学部が独自に用意したプログラムに参加するだけでなく、学生自らが留学プログラムを作成し、それを単位として認定するよう提案する海外派遣プログラムも運用している。このような場合には、なおのことSULAの支援が効果を発揮するものと思う。

3) SULA の課題

このように順調に船出をしたSULAという仕組みではあるが、直面する課題もまた多い。そのうちのいくつかをここに掲げて読者の参考に供したいと思う。

第一に、国際教養学部の学生が高年次に進み、卒業論文の作成や卒業研究に取り組むようになると、初年次を中心とする学修支援とは異なる課題に向き合うことになる。そのためには、学修支援をSULAに委ねるのではなく、教員とSULAが協力して学生がかかえる学修上の問題の解決にあたる体制を整備することが必要である。アカデミック・アドバイジングには、教員の専門的知見を役立てることが有

効である。教職協働あるいは教員と SULA の協働をどう実現するのか、を考えていかねばならない。

第二は、SULA の専門職としての養成をどのように進めるか、という課題である。ゼロから出発した SULA という仕組みが、当初は学務系職員からの選抜によって運営されたことは最初のステップとしては妥当であった。しかし、SULA を持続可能なものにするためには、SULA を大学内で養成していく独自の仕組みが必要である。千葉大学では、教育・学修支援に高度な専門性を有し、「高度な実践力」「体系化された関連知見」「新しい教育の開発・企画力」を有する専門職を養成するために、二つの取り組みを新たにはじめた。その一つは、アカデミック・リンクで取り組んでいる「教育・学修支援専門職養成プログラム」である。ここでは、連続セミナーやシンポジウム、2017 年度からの履修証明プログラムの発行等を通じて、大学教育の質的転換と高度化を促すための試みが行われている。また、2017 年に発足した大学院人文公共学府においては、博士前期課程の人文科学専攻に「教育・学修支援コース」を設置し、広く学生のキャリアや国際交流等も含め、高等教育における教育・学修支援に携わる人材として必要な知識を獲得できるカリキュラムを編成している。こうした SULA を自前で育成していく試みがどのように実現していくか、も今後の課題として認識している。

第三は、SULA を国際教養学部だけでなくどう全学的に展開していくか、その人数を着実に増やしていくか、という課題である。千葉大学では資格取得を目的とする学部を除く 6 つの学部の各学年に 2 名ずつ、大学全体で合計 48 名の SULA が活躍するような状況を理想的な状況として描いている。その第一歩として、2017 年には国際教養学部の 2 名に加え、さらに 10 名が学務系専門職としての兼務の命を受けた。こうした SULA の拡大が千葉大学における学修支援の将来をどのように変えていくことになるのか、SULA となった人びとだけでなく、大学全体がそのような新しい教育のあり方をどう促進していくのか、解決すべき課題は大きいものと言わざるをえない。

4. おわりに

SULA という取り組みは、以上のように多くの課題をかかえてはいるものの、大学が学修支援の専門職を養成し、学生の生活や修学、留学を積極的に支援していくには欠くべからざる仕組みである。学生の学修を支援する SULA を大学全体でどう支援するか、制度面・運用面も含めて着実な改革を進めていきたい。